S. Ashina

＜前回＞オリエンテーション
１．近代の思想状況と自然神学
２．自然神学の新しい動向
２－１：自然神学とコミュニケーション合理性　5/28, 6/4, 6/11
２－２：クレイトンと脳神経科学　6/25
２－３：マクグラスと伝統特殊的合理性、意味論　7/2
３．形而上学批判と形而上学再構築
３－１：ハイデッガーと解釈学　7/9, 7/16
３－２：ホワイトヘッドとプロセス神学　7/23
Exkur：人文学の新しい可能性。科学技術の神学にむけて。

＜前回＞ **Exkurs:** 現代日本における人文学の課題―キリスト教研究の視点から―
１．はじめに
１．現代日本の現実、大学を取り巻く状況：変化を起こしている二つのファクター
・科学技術・市場原理：教育の市場化　・大震災：急激な変化への対応・存在意味
２．大学の動向
大きな変動を先取りした急激な改革、京都大学の場合。
３．この状況下での人文学・人文科学の役割
４．矢野智司（教育哲学・教育人間学）「序論：倫理への問いと大学の使命」
京都大学連続公開シンポジウム「倫理への問いと大学の使命」（2007-2009 年、4 回）。

２．伝統の変容と再建
５．大震災において顕在化した現実、加速化しつつある現実
この事態を宗教という観点から見た場合、特に顕著なこと、死を巡る儀礼システムが機能できない現場。大量の死・戦場と化した安置所、葬儀も火葬も間に合わないのでともかくも土葬。家族・身近な人の死を受け止めきれない多くの人々。
喪の技法・死の了解（生の了解）の喪失。が改めて浮き彫りになった。現代社会は死を病院内に押し込め目立たないようにしてきたが、それは死と向き合い、それに対処する知恵をも失わせたのではなかったか。その背後にあるもの。
６．宗教が果たしてきた役割、死あるいは死後の問いが空転しつつある。
７．近代以降のキリスト教
ジョン・ヒック（1922-2012。宗教哲学者・神学者）:「しかし近代世界では、そしてもっとも保守的なキリスト教徒を除けば、永遠の地獄は神話のなかに消え失せている。天国も同様に消え去っている。もはや天使たちが神の玉座の前で讃美歌を歌うことはない。」(220)
８．再構築の必要性：自前で死も生も支えきれないにもかかわらず、これまで技法が崩壊し、新しい技法もい　まだ存在しない。そのために、人文学はいかなる役割を果たしうるか。知の保存と批判、これによって再構築を助ける。
たとえば、注目すべき、人文学の動向として。死生学（thanatology）の新しい試み。

３．人文学の役割
９．「キリスト教学」とは、いかなる学問か。
・芦名定道「キリスト教学の理念とその諸問題」、
日本基督教学会北海道支部『「キリスト教学」再考』（日本基督教学会

北海道支部公開シンポジウムの記録)、2009 年 3 月、pp.52-71。
・芦名定道「キリスト教学の可能性――伝統とポストモダンのとの間で」、
日本基督教学会『日本の神学』49、2010 年 9 月、pp.252-256。
10. 日本のキリスト教研究の場合：記憶・知の保存と批判の必要性。
11. 記憶の忘却に抗しつつ記憶を保持し共有する試み→キリスト教研究の役割

４．おわりに
16. 新しい人文学への期待

＜北海学園大学人文学部の開設 20 周年記念シンポジウム「人文学の新しい可能性」＞
１．芦名定道「現代日本における人文学の課題―キリスト教研究の視点から―」
人類が培ってきた伝統は、近代以降、そして現代、急速に変容し消失の危機にさらされている。宗教文化が伝承してきた死に直面しての喪の作業（葬儀など）に関わる伝統も例外ではなく、現代日本においては、伝統の再構築が求められているように思われる。
わたくしの発題においては、伝統の変容と再構築に対して人文学がいかなる意義と役割を有しているのかについて、キリスト教研究（キリスト教学）の視点から議論を行ってみたい。

２．佐藤弘夫（東北大学大学院文学研究科教授）「神・人・死者―日本列島における多文化共生の伝統―」
過激なナショナリズムの高揚にみられるように、いま世界中で近代の矛盾が一気に噴き出している。東日本大震災もまた、現代社会のあり方を根底から問い直す出来事となった。
この発題では日本列島を素材として、古代以来の長いスパンのなかで、「世界」の構成員として人間のみが突出する近代の異形性を指摘するとともに、「新人文主義」の問題提起を受け、融和と共存の新時代構築に向けて、人文学が果たしうる可能性について考えてみたい。

３．テレングト・アイトル（北海学園大学人文学部教授）「グローバル化・合理化した世界における人文学―文学の役割とは何か―」
人間は古来、神話と詩と物語と共に生きてきたが、近・現代人は、文学の実用的、功利的、写実的な部分だけを好んで肥大化させ、文学の豊かな部分を萎縮させて自らの内面世界（感情システム）を支えてきた。かくして高度な管理化、合理化された社会が構築できるようになったが、逆に精神が貧困化し、無感動化に蝕まれ、さらに災害・不安・苦痛などに苛まれて、現代人はありとあらゆる手段をもって精神的、感情的な「癒し」を求めている。これは先進国にほぼ一様に見られる一種の逆説的な現象だといえる。
このパラドックスに「呪われた現代人」の内面世界にとって、人文学としての文学は何を意味し、どういう役割が果たせるか、その可能性を問いかけたい。

Exkurs：
科学技術の神学にむけて―現代キリスト教思想の文脈より―
（1）はじめに
１．問題状況
・現代世界の基盤としての科学技術

・３・11 の東日本大震災における原発事故
↓
問いとしての科学技術、あるいは「科学技術の神学」の構築の課題
２．「キリスト教」、「科学技術」の多様性をどのように扱うか。
↓
・聖書テキストから、キリスト教の基本教義を基礎にして
・人間存在から科学技術へ（科学技術は人間の営みである）

（２）人間存在から科学技術へ

３．聖書の創造物語と存在論あるいは人間学という二つの軸を設定し、両者を繋ぐ。
（両者の関係は自明ではない。芦名定道「現代思想と〈神〉の問い――ティリッヒからジジェクまで」（『理想』No.688、理想社、2012 年、40-52 頁）を参照。）

４．聖書の創造物語

「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。」（創世記 1:27）、「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」（創世記 2:7）、「女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。」（創世記 3:6）

（科学技術論としては、創世記のその後の展開が問題となる。特にバベル神話など）
↓

①神の像／支配（創世記 1 章）、②土の塵／耕す／命名（創世記 2 章）、③堕罪（創世記三章）：①と②は、人間存在の有限性、その中で、①は人間存在の善性（伝統的に「創造の善性」）を意味し、②はその善性において成り立つ人間の行為。

土を「耕す」（創世記 2 章 15 節）が「技術」に関連し、「命名」（創世記 2 章 19 節）が「科学」に直結する人間の行為である。→科学技術の原型というべき営み（世界の事象に名を与え、世界の事象を変化させる行為）→聖書の人間理解に従えば、科学技術は人間にとって偶然的なものではなく、人間存在の本質に属する。人間は本来、耕す存在者、つまり「農民」である。（科学技術は、神の創造物が、神の目から見て、すべて善なるものであるということ――「神はお造りなったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった」（創世記 1:31）――からの帰結。）

５．③：善なる本質の歪曲＝疎外
↓
人間存在：本質存在と実存存在という二つの規定によって論じる伝統的な存在論的思惟は、聖書の人間理解の哲学的解釈。
この人間理解は、現代神学においても受け継がれている（たとえば、パネンベルク『人間学――神学的考察』教文館、第一部を参照）。

６．ティリッヒ：有限性と疎外、本質と実存との二重性→人間的生（＝人間の現実存在）の両義性（ambiguity）。
芦名定道「ティリッヒ――生の次元論と科学の問題」、現代キリスト教思想研究会『ティリッヒ研究』創刊号、2000 年、1-16 六頁。
↓

人間は善と悪の混合体。原発は悪、ｉＰＳ細胞は善といった議論は可能か、あるいは原子力について兵器と平和利用の分離・区別は可能か。

７．科学技術の光の側面：

耕す人（農民）である原初の人アダムに科学技術の原型を見ることができる。とすれば、科学技術とは、世界創造の始めから人間存在に備わっていた営みであり、本来人間の善性に属する。これは、科学技術に基づく人類の文明がそれ自体としては神の肯定の下にあることを意味する。

科学技術の積極的な意義づけの議論：福島の原発事故以前の原子力の平和利用という議論をキリスト教思想の側において可能にした。現代のｉＰＳ細胞について流布している「善」というイメージにもおそらくは結び付けうる（？）。

島薗進「生命科学の　グローバルな競争と国際規制」(『福音と世界』2013.1、新教出版社、14-22 頁)

８．科学技術の影の側面：聖書における文明批判、その前提としての聖書における堕落物語。

しかし、人間存在の影の側面と科学技術との関わりを精密に論じるためには、人間存在の存在論的考察に加えて、歴史的パースペクティブを導入することが必要になる。

９．キリスト教と環境危機との関わりを論じる際に不可欠の手続き。

芦名定道『自然神学再考――近代世界とキリスト教』晃洋書房、2007年、第7章。

10. 近代以前と近代以降との間に生じた科学技術の質的変化。

人間存在の両義性における疎外・歪曲の構造性に規定されてはいるが、近代なって顕在化、まさに 20 世紀、劇的な仕方で前面化する。核技術と遺伝子工学。

11. ハンナ・アーレント『人間の条件』

「一九五七年、人間が作った地球生まれのある物体が宇宙めがけて打ち上げられた。この物体は数週間、地球の周囲を廻った。」(アーレント、1994、9)

スプートニク一号の成功が「重要性からいえば、もう一つの出来事、核分裂にも劣らぬ」(同所)事件であるとした上で、その意義・問題性を、「人間の条件」との関わりで論じている。

「人間の条件」を 20 世紀の科学技術は大きく変容させようとしている。

人工衛星が目指す宇宙空間は、「人間の条件の本体そのもの」である地球＝大地から切り離された空間領域であり、ここに顕在化しているのは、この「人間の条件から脱出したいという望み」(同書、11)である。この大地から脱出したいとの欲望こそが、「人間の寿命を百歳以上に伸ばしたいという希望」、そして原子力と遺伝子工学との背後にあるものなのである。

創世記 3 章の堕罪物語は、この「人間の条件」(＝人間存在の有限性）からの脱出の欲望との関わりで解し得る。

12. ティリッヒ『宗教の未来』所収の講義「宇宙探検が人間の条件と態様に対して与えた影響」。「宇宙探検が人間そのものに与える影響」と「宇宙探検が人間の自己理解に与える影響」(ティリッヒ、1999、42)とをテーマ化。

宇宙探検はルネサンスから啓蒙主義に至る「水平線の発見」(＝神や人への奉仕のわざにおいてコスモスを支配し変革しようとする傾向）あるいは「円環と垂直線に対する水平線の勝利」と特徴づけられる近代特有の精神動向に属しており、「十九世紀的な世界的進歩への信仰」はこの線上に位置づけられねばならない。

13.「宇宙への飛び立ち、そして地球を眼下に見下ろす力を得たことの結果の一つは、一種の人間と地球との間の疎外、人間が地球を対象化(objectification)したことであった。つまり、『母なる大地』から『母なる』という性格を奪ったこと、つまり彼女から、命を与え、

養い、抱擁し、彼女のために育て、再び自分のところへ呼び戻す、といった性格を奪ったことである。母なる地球は、完全に計量可能なものとして、観察の対象である大きな物質の塊と化した。」（同書、50）

「大地の非神秘化」の徹底化。原子力技術は、自然界に安定的には存在しない元素を生み出し「外となる自然」の改変を可能にし、遺伝子工学は人間の「内なる自然」の改変を理論的に可能にした＝「人間の条件」の改変のプロセス。

このプロセスは、創造の善性という神の祝福と整合するのかという問い。

14．現代文明の不安。両義性の不安の徹底化。

「人間の不安感は、詩篇第八篇の時代以来、支配する力の中で自尊心とバランスをとっていたのだが、支配する力の増加とともにかえって増加してきたのである」（同書、四九）

原子力技術を最初に形にした核兵器において、人間は「自分の所有している支配力を、人類の一部だけでなくそのすべてを絶滅させるためにも用いることが出来るという事実」に直面する。そして、「この影は兵器の開発と宇宙探検が互いに結びあわされている限りなくなることはないであろう」（同所）。

神の祝福としての創造の善性を喪失する危機＝人間が人間でなくなる危険。

15．科学技術の批判的監視者としての役割。

このためには、科学技術に根本的に規定された文明全体を視野に入れることが必要。科学技術に対するキリスト教的な批判的な眼差しは、科学技術の社会批判（政治と経済）において具体化されねばならない。こ

16．エリュール（Jacques Ellul, 1912-1994）の一九五四年の『技術社会』上下巻、すぐ書房。（*La technique ou l'enjeu du siècle*, Economica, 1990（1954）.）

・栗林輝夫（関西学院大学）「原子力の神学――エリュールとティヤール・ド・シャルダンを対比して」（日本基督教学会近畿支部会、2013 年 3 月 12 日、神戸国際大学における研究発表）。

・松谷邦英『技術社会を〈超えて〉――ジャック・エリュールの社会哲学』晃洋書房、2010 年。

（3）キリスト教思想にとって科学技術とは何か

17．科学技術の光の面へ。神の創造行為と科学技術との積極的な関係づけをめぐる問題。

賀川豊彦：神と人間との関わり、特に神の摂理と人間の自由との関係性

「もしも私たちが神に帰依し、手足を動かすことを拒み、それでいて神は私たちを助けてくださるだろうと信じているとすれば、それは迷信以外の何ものでもない。結局のところ、信仰とは神による可能性を信じることである。この可能性を信じることそれ自体が人間の活動を要求する」（賀川、2009、45）、「愛は人間のチャンネルを通して流れ出る神の働きなのである」、「贖罪愛は全体的な意識、即ち神意識から出る。だから、神より来るものである」、「私たちが私たち自身をとおして神に働いてもらうようにするのでなければ、神ご自身もその可能性を実現することはできない。」（同書、46）

↓

神の可能性を信じその実現のために行為する人間の働きなしに、神の摂理が自動的に実現すると考えるのは神を機械仕掛けの神にする迷信である。この人間の行為には科学技術も含まれている。

↓

創造論へ

18．創造論：理神論との相違。
・聖書の創造物語から「無からの創造」へ。
・一回的な天地創造（原初的創造 creatio originalis）／世界の存立を支え続ける（継続的創造 creatio continua）／世界を完成へと導く（完成する新しい創造 creatio nova）
・第二の創造として救済行為

Jürgen Moltmann, *Gott in der Schöpfung. Ökologische Schöpfungslehre*, Chr. Kaiser, 1985, S.197-221.（モルトマン『創造における神――生態論　的創造論』新教出版社、1991 年、283-315 頁。）

波多野精一『宗教哲学』(『宗教哲学序論・宗教哲学　他八篇』岩波文庫、2013 年、434 頁。「第二段の創造」)

19．継続的な創造行為は、奇跡にも関わるが、奇跡に限定されない（あるいはここに強調点はない)。神の行為と世界の内的プロセスとの関係。神の創造行為が生命進化のプロセスを超えて、人間の歴史的営みを通しても継続されると考えることは不可能ではない。

パネンベルクによれば、「自然法則の中断・廃棄」＝奇跡という議論は、近代以降顕著になったもの。

Wolfhart Pannenberg, "The Concept of Miracle", in: *Zygon*, vol.37.no.3（September 2002）by the Joint Publication　Board of Zygon. pp.759-762.

20．フィリップ・ヘフナーの「創造された共同創造者」(the Created Co-Creator)。

人間は神の被造物であるが、神の行為が現実化することに自らの創造的な行為において共同する存在者、神の創造行為に参与する者である。この人間の行為には、科学技術が含まれる。

コール＝ターナーは、「創造された共同創造者」を遺伝子工学についての神学的議論において取り上げている。

「われわれは、科学技術を共同創造として、つまり、創造における人間の協力として考えるとの提案を考察することから始めたい」(Cole-Turner, 1993,　98)、「フィリップ・ヘフナーは、われわれが自らを創造された共同創造者と考えるべきであると論じている」(ibid., 100)、「科学と科学技術は神の持続的な創造的作業に仕えている。」(ibid., 101)

金承哲『神と遺伝子――遺伝子工学時代におけるキリスト教』教文館、2009 年。

Philip Hefner, “The Evolution of the Created Co-Creator,” in: Ted Peters(ed.), *Cosmos as Creation. Theology and Science in Consonance*, Abingdon, 1989, pp.211-233.

21．神との共同創造という科学技術の議論：科学技術の両義性の光の面をキリスト教思想において理論化する上で、興味深い論点。

↓

科学技術の積極的な評価・理解、つまり科学技術の良き理解者にして協力者という科学技術への関わり方が、キリスト教神学に求められる。

22．「創造された共同創造者」の問題点：

創造された共同創造者の議論の弱点の一つは、科学技術の両義性における影の面の理解が欠けていること＝楽観主義を指摘。

「われわれの科学技術は常に罪、搾取、貪欲のふちに立っている」(ibid., 102)にもかかわらず、この楽観主義は、科学技術の実態を認識することができない。

↓

23．楽観主義の修正。

1)楽観主義を修正するキリスト教的な視点としての「贖い」。

神が毀損され苦悩する存在を救済する行為が贖いであるとすれば、この贖いに参与する人間の行為、たとえば、科学技術は罪、搾取、貪欲を楽観的に見逃しそれらを助長するのではなく、「苦しみ破壊されたものへ共感において応答する」（ibid., 101）ものとならねばならない。

神の創造行為に参与する科学技術：新しい存在形態を世界にもたらすプロセスを促進する。

神の贖いの行為に参与する科学技術：苦しむ存在（たとえば、自然環境）の苦痛を和らげる。

「科学技術は贖いと創造の関係性において見られねばならない」（ibid.）。

2）創造と共同創造に登場する隠喩表現についての議論。

現実の科学技術は多様であり、影の側面もさまざま。楽観主義の修正には、この諸科聖書における神は、農業と密接に関連した隠喩において表現されている。

「主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらすあらゆる木を地に生えいでさせ、また園の中央には、命の木と善悪の知識の木を生えいでさせられた」（創世記 2:8-9 二章）

「劇的な仕方でしかも明白にも、ヤハウェは最初の園丁なのである。造園あるいは農業は創造自体の隠喩である。」（ibid., 103）

↓

隠喩表現は、単なる言葉の飾りではなく、むしろそれによって表現された事柄に価値と正当性を付与し、人間の行動に影響を及ぼす。神が農夫や園丁の行為（技術）を通して働くとすれば、その行為自体が神との関わりで価値あるものと見なされ、宗教的に正当な技術として承認されることになる。

「もしわれわれが神を特定の科学技術を通して働くものとして描くとすれば、われわれはわれわれの目的をその神の目的と合致させることを望むだろう」（ibid., 106）。

↓

すべての科学技術が同等の価値を有するわけではない。特定の科学技術についての批判的な見方は、聖書における隠喩表現という観点からも可能である。

24．個々の科学技術に対する評価あるいは関わりは、可能か。

現在のキリスト教思想が直面する問題状況。理論的な考察や分析の蓄積が現代のキリスト教思想には欠如している。自然科学・科学技術の問題を回避するキリスト教思想の伝統がもたらした現状。

「最近の神学的また典礼的な著述家で、神と科学技術を結びつける者はまれである。この沈黙によって、現代の科学技術は神に縁もゆかりもなく、おそらくは神の敵あるいはデーモンでさえあるとの考えが強められているのである。」（ibid.）

25．「科学技術の神学」の手がかり、そして科学技術に対するキリスト教思想の関わりを責任あるものとする前提としての自然神学の再構築。たとえば、モルトマン『神学的思考の諸経験』。神学者と自然科学の対話の場（共通の場所）を構築する。

芦名定道『自然神学再考』、晃洋書房、2007 年。

Ａ・Ｅ・マクグラス『「自然」を神学する――キリスト教自然神学の新展開』教文館、2011 年。

モルトマン『科学と知恵――自然科学と神学の対話』教文館、2007 年（原著 2002 年）。

（4）むすび

26. 科学技術の両義性とそれに対するキリスト教神学の応答・役割の両義性。
最終判断の終末論的留保。
一ノ瀬正樹の言う「不可断定性」。
一ノ瀬正樹『放射能問題に立ち向かう哲学』筑摩書房、2013 年、特に第 10 章（209-223 頁）。

＜引用文献＞

１．ハンナ・アーレント『人間の条件』ちくま学芸文庫、1994 年。（Hannah Arendt, *The Human Condition*, Second Edition, The University Press of Chicago Press,1998（1958）.）
２．ティリッヒ「宇宙探検が人間の条件と態様に対して与えた影響」、パウル・ティリッヒ『宗教の未来』聖学院大学出版会、1999 年、42-58 頁。（Paul Tillich, "The Effects of Space Exploration on Man's Condition and Stature," in: *The Future of Religions*, Greenwood Press, 1966, pp.39-51.）
３．Ronald Cole-Turner, *The New Genesis. Theology and the Genetic Revolution*, Westminster/John Knox Press, 1993.
４．賀川豊彦『友愛の政治経済学』日本生活協同組合連合会、2009 年。（Toyohiko KAGAWA, *Brotherhood Economics*, Harper & Brothers, 1936.）
５．モルトマン『神学的思考の諸経験――キリスト教神学の道と形』新教出版社、2001 年。（Jürgen Moltmann, *Erfahrungen theologischen Denkens. Wege und Formen christlicher Theologie*, Chr.Kaiser, 1999.）

＜参照文献＞

１．３・11 の東日本大震災と原発事故・原子力をめぐる、キリスト教思想関連の議論。
・新教出版社編集部編『原発とキリスト教――私たちはこう考える』新教出版社、2011 年。
・日本基督教団救援対策本部編『現代日本の危機とキリスト教――東日本大震災緊急シンポジウム』日本キリスト教団出版局、2012 年。
・新免貢、勝村弘也著、関西神学塾編『滅亡の予感と虚無をいかに生きるのか――聖書に問う』新教出版社、2012 年。
・『基督教思想』編『原子力とわたしたちの未来――韓国キリスト教の視点から』かんよう出版、2012 年。
・森野善右衛門『原子力と人間――３・11 後を教会はどう生きるか』キリスト新聞社、2013 年。
・荒井献、本田哲郎、高橋哲哉『３・11 以後とキリスト教』まぶね舎、2013 年。
２．核とキリスト教
・ティリッヒ「水素爆弾」（1954）、「ベルリンの状況における倫理的問題」（1961）（ティリッヒ『平和の神学　1938-1965』新教出版社、2003 年、所収。Ronald Stone（ed.）, *Theology of Peace. Paul Tillich*, Westminster/John Knox Press, 1990.）
・ゴードン・D・カウフマン『核時代の神学』ヨルダン社、1989 年。（Gordon D. Kaufman, *Theology for a Nuclear Age*, The Westminster Press, 1985.）